

附載 豊川海軍工廠平和公園開園記念シンポジウムの記録

平成30年6月24日（日） 午後1時30分から

於：豊川市文化会館中ホール

■主催者あいさつ 豊川市長 山脇 実

みなさんこんにちは。ご紹介いただきました豊川市長の山脇でございます。本日は豊川海軍工廠平和公園開園記念シンポジウムということで大変多くの方にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。

今月一日、豊川市は市制施行75周年を迎えました。その75周年のあゆみを振り返る際に、豊川市誕生の原動力となりました豊川海軍工廠の存在や昭和20年8月7日大空襲の悲劇は、決して忘れることのできない出来事でございます。この海軍工廠跡地の戦争遺跡を保存整備し、戦争の悲惨さと平和の尊さを学ぶことができる公園として、去る6月9日に豊川海軍工廠平和公園が開園をいたしました。開園後、連日大勢の市民の方々が平和公園を訪れていただきまして、また小学校6年生の見学事業も始まりました。養成講座を経て登録された語り継ぎボランティアの皆さんが、来園者のガイドに大活躍をされていることを誠に嬉しく思っております。

本日のシンポジウムでございますが、平和公園の整備検討委員会の委員長を務めていただきました愛知大学名誉教授の藤田佳久先生にまず基調講演をいただきまして、残存遺構の保存整備工事の監修者であります泉田英雄先生と市教育委員会の担当者による基調報告の後、パネラーとして八七会会長の大石さん、海軍工廠跡地保存をすすめる会の会長の伊藤さんをお迎えいたしまして、平和公園と豊川海軍工廠の語り継ぎをテーマに意見交換がなされる予定でございます。全国的にも特色のあるこの平和公園の活用方法とそこで行われる語り継ぎ活動につきまして、関係者の皆様から様々なご意見やアドバイスがいただけることを期待しているところでございます。

最後に戦争の惨禍を防止し、恒久平和を実現する

ことが私たち市民の願いとした平和都市宣言の実践のため、本日のシンポジウムの関係者の皆さんや語り継ぎボランティアの皆さんのご協力のもと、豊川海軍工廠平和公園が広く市民の皆さんに利活用されることを願ひまして、シンポジウム開催にあたりまして私の挨拶とさせていただきます。今日はありがとうございます。よろしく申し上げます。

■記念講演「豊川海軍工廠と豊川市」

藤田佳久氏（愛知大学名誉教授）

みなさんこんにちは。只今ご紹介いただきました藤田と申します。ご紹介いただきましたように地理学をずっとやってまして、豊川地域あるいは東三河地域あるいは日本全体、あるいは中国とかイギリスとか結構あちこちいろいろ回ってまいりました。現在は砂漠緑化のまとめ役をやっていて約300万本を植林中です。ご興味のある方は、ぜひホームページから見ていただくと大変ありがたいですね。

私はですね、先ほどご紹介いただきましたように、豊川に住んでおりますけど、豊橋から小坂井（豊川）に移った直後に豊橋の空襲があって、豊橋の家は全部焼けてしまいました。浜松の艦砲射撃、豊橋の空襲など隣の町が焼けるのを見たことがございます。ところが小坂井に移ってからですね、地元の方がお饅頭を私と弟にくれたので食べたんですけど、腹をこわして大腸カタルをやってしまい、戦時中ですね、ここの共済病院に入れていただいて治療を受けたことがあります。だからもう少し後に共済病院は空襲で焼けてしまったから、そしたら私もこの世には存在していなかったのではないかと思うんです。B29の爆撃が大恩寺山の方から始まってですね、豊川が地響きをたてて大地を揺るがして、たちまち空が真っ暗になりました。僅かな時間だったんですけど、



藤田佳久氏の記念講演

黒煙が空いっぱいを覆って、その雲の合間からですね、艦載機が地上に向けて銃弾を発射する怖い経験を子ども心にすることがあります。私の生まれてからの記憶は、大きな三河地震と海軍工廠のこの爆撃でありまして、そういう点では本日こういうテーマでお話できるのも、何かのめぐり合わせかなというような気がします。

じゃあ早速ですけども入らせていただきます。これは先日完成いたしました豊川海軍工廠平和公園であります。先ほどご挨拶いただいた山脇市長さんが今から10年ほど前に公約で掲げたのが10年かけてついに完成したということでありまして、その間多くの方々のご協力をいただいたということが、このあとのいろいろな方からのお話からもお分かりいただけるのではないかなと思います。これが少し前の空中写真、この中の左上の方に黒い森が見えますけど、あの真ん中よりもちょっと右手の森の中に、今度の平和公園ができました。まあ平和公園ができる前だから真黒ですけどね、この全体を包む四角形の敷地、こちらが少しはみ出していますけど、中央部の敷地これが約50万坪で、後で付け加えられました。こちらの方が10万坪で、関連施設を入れると約100万坪という壮大な大きな工場ですね。当時の海軍が全力でもって豊川の海軍工廠を造ったということだと思います。海軍工廠というんですね、なぜ海軍かっていう感じがしますが、太平洋戦争に入りますと、海軍基地で潜水艦、軍艦などを造ったりするわけですけども、このころになるとここで使

う銃弾とかですね火薬ですね、その生産が追いつかなくなって、ここで本格的な工場生産が必要になったというわけです。最初は日本の中ではですね、横須賀からスタートしました。これは江戸時代の製鉄所ですね、それを海軍が工廠、軍需工場として、鎮守府というふうに当時呼びましたけど、あと佐世保とか呉とか。また舞鶴、北陸の方ですね、その4箇所が明治時代にあって、呉の隣の広というのは本工場から派出して独立したものが大正時代にできました。そのあと軍縮、1923年のワシントン軍縮条約があって、軍備が縮小していくわけですね。しかし日中戦争が始まって、再び戦時体制に入っていく、その最初に豊川の海軍工廠ができたのです。したがって海軍としては初の平坦地、おもいきり工場を展開できる、そういう場所としてここは選ばれております。これはもう世界最大級の軍需工場でありました。

ところでその場所は、こういうふうに当時の豊川町と牛久保町、八幡村と国府町、国府の方は直接関係ありませんけれど、この3つの境界線のところに約60万坪の土地が設定されました。何でかっていうとこれは、北の方に本宮山があります。本宮山から流れてくる土砂を佐奈川が運搬します。その運搬した佐奈川がですね、もともと洪積台地といって、この段丘がずっとあるところ、その上に佐奈川が扇を広げたような地形をつくりました。これ扇状地といいます。最近ではプラタモリっていう番組がありますが、彼は地形に非常に詳しいんですね。高校の時に地理が好きだったそうです。地理学の啓蒙活動に貢献したということで、日本地理学会はタモリさんを表彰しています。こういう洪積台地の上に佐奈川扇状地、下流の方は小坂井で全面的に洪積台地で、国交省は小坂井台地と呼んでいます。こういう場所で雨が降ると、みんな下へ浸透してしまうんです。砂礫が多いから。だから田んぼはできない。だから長い事ここは、周辺の農家の人達の入会採草地で、いろいろ時々入会をめぐる紛争があったりしました。しかし広大な敷地であります。そこが空いていたというわけで、そこに白羽の矢が立たったわけです。

話がちょっと戻りますが、これは豊橋の地図です。中央部がお城のあるところ。ここに明治に入ってから、18連隊が名古屋から分かれて来て独立します。この兵士達は日清戦争で沢山亡くなっています。これも洪積台地の上ですね。さらに大正期に入りますと、豊橋の南の方に陸軍第15師団が入ってきます。日露戦争がほぼ終わりかけた頃、日本に兵士がいなくなってしまう、在庫ゼロに近くなってしまう、そこであわてて兵士をつくらなければならない、というわけで15師団、16、17、18師団を設けます。その一つの第15師団を東海地方に設けるといって豊橋が誘致に成功したのです。これは渥美半島にかけての丘陵部がシベリアに似ている、あるいは満州によく似ているということが、大きな背景にあったといわれます。兵舎が左の方にあります。ここは今、愛知大学が入っている部分です。時習館高校とか工業高校とか文教地区になっております。

話を戻します。その歴史のあとに、豊川の海軍工廠で、左上の黒い森がありますね、中央部の森はお稲荷さんです。そのとなりの黒い森のところに白羽の矢がたったわけです。左側が現地の地形図をクローズアップしたところでありまして。左上から右下に走っているのが姫街道、その上のところに土地が求められました。右側の写真はその景観です。こんな感じだったんですね。ここを用地とした。下の写真は昭和13年にこの海軍工廠建設の話がでてきて、14年に起工式が行われて、早くも1,500人がここに赴任してきます。その14年12月には開庁式が行われ、素早かったんですね。先ほどの愛知大学にあります第15師団の兵舎も1年で工事を終えています。本体が動くとき非常に資金力があるんですね。これは自衛隊の展示室の中の模型ですね。こんなふうな建物ができる。右下の方が南側ですね。ここから奥の方を眺めた風景です。ところが軍隊がいろいろ建物を建てようとする、豊川町、牛久保町、八幡村とかさらには国府町も、個別に同じ交渉をしなくてははいけない。めんどくさい。だから一本になれということがあって、ここで4町村は豊川市としてある意味でい

うと強引に合併させられたわけです。このような例は鈴鹿もそうですし、全国各地にあります。これは豊川のあと短期間のうちにできた海軍工廠ですけれども、同じような動きを示しております。

昭和13年以降の動きを見ていきます。人口を各町別に見ていきますと、昭和13年が一番上から八幡、豊川、牛久保、国府となっていますけど、八幡が一番少ないんです。昭和17年工場が出来上がりますと、人口は八幡が一番多くなります。総数が7万1千人、最盛期には9万人を超えたというふうにいわれています。その頃の職業ですね、これを見ますと工業での従事者が3万3千人ですね、非常に高い割合、断トツに軍需工場都市に豊川はなったということが分かります。そして先ほど申し上げましたように、昭和18年いろんな協議を経て豊川市は誕生しました。6月1日ですから、今6月ですのでね、今から70数年前ここに豊川に街が誕生したわけですね。その時の人口が7万4千人。全国で208番目の都市として産声を上げたというわけです。しかし、各合併町村はそれぞれ違った町ですので、合併したといってもいかに全体を調整していくか、なかなか大変だったところもあります。

できあがった工場はこんな感じですね。一番左下のところがようするに銃器を作る、空色ですね、銃器を作るところ、黄色の部分は火薬を作るところ、上の方の緑のところはそれを補完するところ、土手で囲まれたところ、右の方は追加されたところで、右下の方は、グリーンのところはやがてのちにミノルタが戦後でできますけど、大阪から来たレンズ工場ですね、レンズでもって双眼鏡とか潜望鏡とかいろいろ作る。その隣の青い部分はもっと進んだ技術を持った、今風にいうとリモートコントロールでできるのではないかという、そういう技術開発をやったところ。しかしこれはもう昭和18年、終戦の2年ほど前、日本軍がミッドウェーとかマリアナで大敗北を喫した頃です。それには間に合わなかったですね。したがってアメリカの方は先を打って出て、待ち伏せされて日本海軍は壊滅してしまったですね。

工廠の最大の経緯に関しましては、多くの犠牲

者が出たことです。あとでできますけど、そういう犠牲者をお祀りするということで、多くの方々がいろんな調査を行っております。その中でいろんな力作がありますけれど、この右手の本は『豊川海軍工廠の記録』とって決定版のような形で出ました。本屋でも出てますが、1冊4千円というちょっと値段がありますけど、左の方はハンドブックで気軽に見られる、分かり易く、これは1冊いくらだったかな、7・8百円くらいで購入できますが、こういう作品も出ており、私も随分関心させていただきながら、読ませていただきました。多くの新しい経験談も沢山入っています。先ほどご紹介いただいたように、豊川市史の近代・現代編を私の方で編集しました。その時のモットーはいくつかありますが、一つは豊川海軍工廠について、これまでいろんな方がいろいろ調査をしてきている、それを市史の中で総括的に1本で決定版、思い切った形で出してみようという考え方がありました。それを実行いたしましたので、もし皆さん方も図書館等でご覧になる機会があれば、豊川市史の近代・現代ですね、本文・資料編見ていただきますと、西田先生とか中山先生とか石田先生とか思い出しますが、小中学校の先生たちがものすごく頑張って作られたですね。ここではこういう成果をせっかくですので使わせていただきながら、お話しをさせていただきます。

これは海軍工廠です。生産施設が出来上がって伸びていくわけですね。しかも配置を見ていただきますと分かるように、これも大枠ですけど格子状に区割りがされていて、京都の碁盤目状の街のような工場です。これも一番近代的なシステムを導入したのと、流れ作業で大量生産をやるというようなことで、従来日本にはなかった工場というものをごここに完成させたのです。下水道も水洗トイレになってましたし、電気・ガス・病院、そのほかいろんな施設が揃ったわけです。そういう超先端的な軍需都市の核が誕生したのです。軍需都市とまではいかないが工場及び周辺の関連施設もここに集まってきた。で、これをやはりアメリカが知るところとなったのです。このピンク色の所

が高射砲その他防御施設ですね。アメリカ軍は偵察機でこういうことも観察していた、前の年にはですね、こういう正確な図を作っているのですね。爆撃の日は広島原爆のあくる日ですね、8月7日ですね、南太平洋で日本軍が敗れてしまった島々、アメリカは飛行場を使って、豊川はもちろん、日本全体を爆撃範囲にできたわけですね。最後の最後の方で豊川へ潮岬から尾鷲を通して三重県の松坂上空経由で知多半島、そして最後に豊川の爆撃をやったわけです。銃器を作るところと火薬を作るところ、さらに先進的な技術のところも集中的に狙われています。いくつかの爆撃目標があったように思われます。B29はグループに分かれて、それぞれの島から離陸して大量の3千3百発くらいの250キロ爆弾ですから、全部で何百トンにも達したのか、1箇所にこれだけ集中した爆撃があったのは日本の中で珍しいと思います。何でそういうことをしたのかとなるわけですが、ある人は前の日の広島、次の次の今度はプルトニウム、最初はウランでその真ん中に普通のこういう爆撃がどのくらい効果があるのか比較しようとしたのではないかというようなことを言う人もおられます。その辺はもう少しきちんと資料を見ないと分からないですね。その結果、右の方は空中写真ですけど、姫街道の上の白いところ全部写っているわけではないですけど、あそこが爆撃されたところです。左下はその時の写真。これは着弾地点です。細かいことをすぐ調査したんですね、当時の海軍省は。建物の間に黒い点がうってあります。これは主に狙ったところを円で囲ってあるんですけどもね。それからですね調べて見ますと、建物に直撃をした建物ですね、これをちょっと色で塗ってみました。南の方が圧倒的に多いんですけどもね。それから隣に落ちたから爆風でおかしくなってるには違いないんですけども、直撃を免れた建物はこれだけあった。このことは豊川市は戦後街づくりをしていく上で重要なことです。全壊していないのがいくつか残っていた。しかも下の方の大きい建物がいくつか半壊等のレベルで残った。これも大きなことです。これ総合的にみま

と左下の黄色・薄緑のが半壊、黒いのが全壊、上の方のピンク色が無傷であります。つまり、全壊はともかく半壊くらいで残った建物は結構沢山あった。これも戦後の豊川市にとってみればラッキーなことであったということですね。しかしながら多くの犠牲者がありました。ここでは部署別のやつを合計して2千6百という数字を出してあります。細かいことをちょっと省かせていただきたいと思います。まとめますと工場関係が2,517人、豊川市内で一般の方も含めて113人、御津は大恩寺の前に砲撃を受けた時に爆弾を落とされて亡くなった人34人、帰りに浜松、都田の方で、また15師団の方にも1発落ちて、余った弾ですね、建物に当たらなかった、戦後愛大になっても池のようにずっとなっていました。多くの関係者が亡くなったので、お稲荷さんの境内に供養塔を建てますが、あとですねあまりの多い数ですので死者の処理をするのがなかなか大変で、この諏訪地区のここと、千両の山の中に大きな穴を掘って、そこへそのまま埋めた。亡くなった関係者はみんな軍属だっているというわけで、勝手に個人ではお祀りできないということがあって、6年間そのまま放置されてしまったのです。ここはちょっと大変だったんですね。これは先の図と対応しますが、黄色で示した施設ですけど、これだけ残りましたよということですね。これは工場の外側です。工場の中で今度はいろいろな道具の類、機械の類の台数、これだけ残った。工具類は3百万挺残っていた。これはある意味では、そういう関係の人からいうと宝物に見えてくるところがあったんでしょう。

合計の人口をちょっと見てみますと、昭和19年が一番右です、海軍工場の立地が決まってからずっと人口が全国からここに集まります。地元の人はもちろん、最後になりますと足らなくて学徒動員ですね、中には高等小学校の児童までが招集されており、大変な悲惨な出来事があったわけです。さっきの爆弾の分布を見てもですね、とくに西門付近に集中している。多くの人は逃げるサインが遅かったために、避難出口とされていた西門に来た時には爆弾の雨あられで、しかも門が閉ざされ

ていたといいます。命令がないと開けられないということがあった、そういう証言がありますね。係官が出てきて見かねて俺が責任を取るというわけで強引に開けさせて、押しかけて来た人達はそこから爆死した工員を踏み越えて外に出たけども、工場の周りの溝、今も残っていますね、あの中に入り込んでしまって、そしたら爆風があそこを通るたびに、人の体の一番柔らかいところがやられる。お腹を。みんなお腹をやられて腸が出て、大変な目にあったというような記録がそれぞれに文集、語りの中に出てまいります。

しかしながら人口見てみますと、どんどん増えたけど、爆撃のあとストーンと落ち、人口が半分になってしまうわけです。各地から来た人も里帰りしてしまった。豊川市としては途方にくれたわけですね。とりあえず何とか街づくりをしようというわけで、昭和20年代に最初の時に作った都市計画図がこれです。何ともラフなスケッチでよく分かりかねますが、豊川、牛久保、左下が豊橋で、向こうが国府、こっちの工業地帯が工場のところですね、住宅、商業施設、牛久保・豊川あたりでしょうかね、上の方に学園都市というのを設定しています。各地の町で建物から焼け出された人たちが、豊川に残っている施設に集中したわけで、沢山の希望があったんですね。これは名古屋大学系の建物ですね、これは愛知学芸大学、師範学校の建物ですね、これは工員養成所とあわせて市立の工業高校を作ろうというので出て来た、工業高校の前身ですね。それから機械を搬出したり、日本が敗れますとこういう工場に賠償という形で、機械を中国とか東南アジアとかベルギー、オランダなどへ渡すことになり、そういうわけで機械を勝手に使えなかった。この図では真ん中に軍需工場があって、その周辺部にいろいろなサインがありますけども、こういうのは関連工場あるいは、終戦近くには疎開した工場、こういう沢山の施設が豊川には出来ておったわけですね。ところが全部焼けてしまって中心となる核がなくなってしまったものですから、お金が市に入っていない。この苦しいところ、赤字がどんどん増えていってま

す。一人あたり工業生産額をみても、豊川は愛知県の都市の中をみても最低、豊川は4千円ぐらいでしたか、拳母、豊田は5・6万円ですね、ずいぶん一人あたりが違う、このような中で当然税収は入ってこないですね。初めて、民選、公選で登場した福山市長、彼は財政の実態を明らかにして、街づくりのプランを出した、公表したんですけど、実態を把握したとたんにはですね、もうお金は入らない、10年間は入ってこない、このままではとんでもないことになる、ということが分かったのです。そこでどういうことになったかという、ずーと人口が増えてストーンと落ちて、また少しづつ上っていきますけど、この赤い矢印の昭和30年代、ついに豊川市が自分で都市経営ができなくなったんです。国及び県の管理下に入った、これが10年間、豊川市でありながら市でない、そういう苦悩に満ちた時代になったのです。福山市長から次の鈴木市長ですね、随分奮戦努力したんですけど、なかなかこの難しいところがあった。これでは工廠の施設を何とか利用するしかないというわけで国と交渉するんですけど、国はこういう施設は一括利用でなければだめだと最初言うんですね。そんなところへあるモーター会社が来て一括利用したいと申出て、市の方も大喜びするんですけども、今度は国がいい返事をしなかった、というようにもあったりしてなかなか苦戦続きだったのです。左上が名古屋大学の空電研究所。これは雷と飛行機の間接関係を調べていたので、米軍が入って来てこれは役立つ、そのまま温存させたということですね。右の方は自衛隊、最初は警察予備隊、順に保安隊、自衛隊になりますが、その建物としてここは使われた。赤い部分は戦時体制のもとで、日本の鉄道網の電車もなくなってしまった、それを修理・生産するという国鉄の分工場ですね、これは優先的にGHQが認めた。

こういう形で市の方が助成金を出したというようにことですね、助成金の総額が真ん中のところピークぐらいにあがっていくんです。誘致条例を作って市の方も国・県からのお金を少し融通してもらいながら、これは借金になるんですけど

もこういう風にお金を融通してもらいながら、こういう鉄骨で残った建物がありますね、こういうところも工場に使えるというわけで、福山市長から鈴木市長にバトンタッチする頃、国との交渉でようやく部分分割を実質的に認めてもらったんですね。こういうものが役に立つ。これは疎開工場の建物ですね。そういう中で40年代に入ると、一気に工場誘致が進んだんですね。これ夢みたいな話です。大手がいっぺんに入ってきている。皆さん、これおなじみの会社ですね。それができますと、新たに関連企業も進出してきて、この真ん中の点がいくつか集まっているのは、枠があるところは工廠ですけども、30人以上の工場を示しますとこういうことで、黒いのは金属系、だから機械工場関係のところが多いんですね。それとならんで戦前豊川市になった時に、畑ばかりじゃしょうがないから区画整理をやろうということで、こういう右手の赤いところで区画整理事業をやったんです。ところが戦時体制になってお金がなくてできなかった。それを戦後の福山市長の時代に、お金のないとき、桑畑ばかりの台地の上に線を引いて、今の豊川市の非常にきれいな区画ができた。これは非常に思い切った英断だったんですね、これは先を見据えた一つの考え方。この真ん中は今の一番大きい事業プラン。黄色はこれからそのあとやりますよというプランですね。この赤いところが非常に意味を持った。その結果がさきほどのように工場がそこに入ってきて、区画整理をやりますと道路を広げますから畑が減ってしまう、畑が減るけれども畑じゃなくて工業施設だから減歩がなくてもいける、そういうメリットがあったんですね。これは住宅ですね。住宅地も工場ができますとそこに入ってくる。

そして40年代によく都市計画を作った。真ん中の黄色の部分住宅地ですね、赤いところが工業用地、工場も含めて、橙色が準工業地帯として、こういうプランを作って、先ほど一番最初にお示した、都市計画図に比べますとリアリティがあります。実際に70年になりますと、商店も工場が増えるというふうな中で増えて、これ豊川稲荷

ですけれど、お稲荷さんの門前町も活性化してくる、地価も門前の方が高くなって、それなりの復活を遂げる。これは新しくできた、当時は中部と呼んでましたけど、諏訪町ですね。一番南が諏訪の駅からずっと市役所の方へ行く広い道です。ここに商店街ができつつあった。この場所に関しては、こういう状態の時に、これからの豊川の核をどうするべきかという議論があったんです。第三次総合計画の時、僕が委員長になって、市の核はやっぱり諏訪にもっていくべきだと、これまでの経緯も考えつつ、そういう提案をしたんです。けれど、豊川の代表の人は豊川がいい、牛久保の人は牛久保がいい、国府の人は国府がいい、となかなか意見がまとまらなかったんですけど、最終的に議論をやって、ようやくここを核にしよう、豊川の核にしようということになり、路線地価も赤いラインのところが一番高くなった、こんな形で豊川の街もどンドンと発展していったわけです。だから真ん中、前半のところが一ピクで企業がどンドン入ってきて、それからずーと落ち着いてきたわけです。豊川の街が安定期に入って、一番最後は平成13年です。こういう状態で豊川の街はやっと戦後の混乱期を越えて、しかも工廠の遺産をフルに活用できた、そういうところが大きいと思います。やはり従業員が一番多いのは工業関係の赤いところですね。赤いところの人たちが非常に増えて、豊川は工業都市として、軍需工場都市の軍需が無くなって平和産業の街へ転換したわけです。

隣の豊橋はどうかというと、左の方、赤い所東海道の中心地です。ところがそれを含めて右の方は、6月の戦災でみんな焼けてしまった。下の方は15師団で、のち学校です。被災を免れた。こういう形で。旧都心は一斉にそういう点でなくなったわけですけども、もともと商業というのがベースであったために、例えば右下駅前集中化ですね。のちに豊橋戦争ともいわれたようなスーパーマーケットが駅前に勢揃いして集中したんですね。今とはだいぶ違うんですね、駅中心に豊橋の市街地は大きく様変わりしました。左側の図は都市計画図です。一方、豊川は区画整理事業が都市計画の代わりになったんですね。これはすばらしいこと。

豊橋は師団を誘致した時に、思い切り道路を作った。しかしそれを実現する余裕がなく戦争で焼け野原になったあと、大正中期に作った都市計画道路案をそのまま復原した。こういう経過があって豊橋の場合は、軍需都市というよりはまさに軍隊都市の変化、東三河にこの二つの街がありましたね、軍に関係するのが、ちょっと行き方が違ったところがありました。

これは私がメモ書きですずっとやって来た部分で非常に重要なメモなんですけど、海軍工廠の周辺に関連施設がこんなに沢山残り、こういう施設を豊川市は戦後、非常に苦労しながらですね、利用できるようになってきた。しかも工場だけではなくて、周辺部の施設、市役所・病院等は公共施設として、からあと新学制学校はたくさん造らなくちゃいけない、そういうのも関連施設やその跡地のところに造った。この文化会館もそうですね。いろいろ土地がこんな大量に利用できた街はないわけですね。その代わり土地に左右されて、施設があちこちにばらばらになってきたところがありました。しかし、それゆえにこれからは、そういうところをうまく繋げながら、中心部である諏訪町一帯、このあたりのところをですね、盛り上げていくのが非常に今後の大きな課題になるんじゃないかなというふうに思いました。

こういうふうに考えていきますと、豊川市の今日は非常に安定してきている、合併もしてまた広がって、人口18万人の街になったわけですけども、その根底には海軍工廠、そこに多くの犠牲になった方々がいる、そういう点でこの海軍工廠というのは、豊川の街の原点であるという思いをやっぱり市民の方々に共有できたらいいんじゃないかなと思います。そういう点で豊川の平和公園ができた、平和公園をそういう豊川市民のメモリーとして、共通できる記憶の一つの宝物としてですね、亡くなった方々をお祈りしながらですね、記憶を維持継承していただけたら非常にいいんじゃないかなと思います。以上で私の発表は終わらせていただきます。